

国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容: 「漢文」の訓読 ①

P38~P41

学んで時に之を習ふ-「論語」から

氏名

年 組 番



◎まずは漢文の復習から

—漢文とは—

もともと「やまとことば(和語)」という「話し言葉」しか有さなかった我が国大陸との交易により、文化や宗教、そして文字という「書き言葉」が伝来してきます。いわゆる「漢字」です。漢字の特徴は、「表意文字」といって、文字そのものに意味を持つということです。これに対して、西洋の文字は、アルファベット(A・B・C…)等、記号であって、音を表す「表音文字」ではありませんが、ひとつひとつの文字に意味を持つ「表意文字」ではありません。

漢字という外来の「書き言葉」を日本語である「やまとことば」と融合していったのです。我が国のもとも古い書物である「古事記」は、日本語の音や響きをそのまま読めるように漢字を当てた万葉仮名で表記されています。同時に編纂された「日本書紀」は対外的な側面もあつたか、こちらは漢文(中国の言葉)で書かれました。ともかくにも日本の歴史を振り返る上で「書き記して伝える」「書き言葉を持ったのは、このときなのです。」

平安時代になると、これまで万葉仮名であった「漢字」をくずして、片仮名・平仮名が生まれます。ここから「表意文字」である漢字と「表音文字」である仮名とのハイブリッド化(組み合わせ)による「日本語」が完成形へと向かっていくのです。

さて、ここでは、日本語の基となった漢語(漢文)について学んでいきましょう。漢文とは次のようなものです。見てわかる通り、漢字だけの文です。この漢

**白文** 楚人有鬻盾与矛者 誉之曰 吾盾之坚莫能陷也 又誉其矛曰 吾矛之利於物无不陷也 或曰 以子之矛陷子之盾何如 其人弗能应也

**韓非子** 矛盾

なので、読みの順を示す「返り点」は漢字の左下に置きました。これら訓点を配した文を「訓読文」といいます。

訓読文

矛盾 「韓非子」

楚人、有鬻盾与矛者。 吾盾之坚、莫能陷也。 又、誉其矛曰、 吾矛之利、於物无不陷也。 或曰、 以子之矛、陷子之盾、何如。 其人、弗能应也。

漢字の右横にふられたひらがなは、読みを表す「ふりがな」です。漢字の右下にふられたカタカナは、「送り仮名」です。漢字の左下にふられた符号は、「返り点」です。

書き下し文

矛盾

楚人に、盾と矛とを鬻ぐ者有り。 之を誉めて曰はく、 吾が盾の堅きこと、能く陷すも 莫きなり。」と。

又、其の矛を誉めて曰はく、

あとは、先人が編み出した「返り点」の規則を理解できれば、「漢文」を読めるようになります。なお、訓読どおりに漢字仮名まじりで日本語表記にしたものを「書き下し文」といいます。(漢文は古典扱いのため歴史的仮名づかい)

「吾が矛の利なること、物に於いて 陷さざる無きなり。」と。

或るひと曰はく、 「子の矛を以て、子の盾を陷さば 何如。」と。

其の人、応ふるに能はざるなり。

国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容: 「漢文」の訓読 ②

⊕ P38~P41

学びて時に之を習ふー「論語」から

氏名

年 組 番



◎ 漢文の訓読

返り点の規則

- ▽レ点 下の文字から一つ上(すぐ上)の文字に返る
- ▽二点 下の文字から一つ上(すぐ上)の文字に返る
- ▽二点「一」のついた文字が読めたら「二」へ返る
- ※二つ以上、上の語に返る時に用いる
- ※上下点(甲乙点)も一一点と同様の規則
- ※返り点は、言葉のとおり「前へと返る(もどる)」のです。
- 先へ飛ぶことはありません。
- ※一・二・三と「三」まである場合(上中下、甲乙丙)
- 「一」を読めたら「二」に返り、次に「三」に返って読む

◎ 大前提として上から順に読み返り点があったら気を付けるとよい。

▼ 漢文訓読の練習

例 A B C

↓ A C B

① A B C D

↓

② A B C D E

↓

③ A B C D E

↓

④ A B C D E F G H

↓

⑤ A B C D E F

↓

次は実際の漢文でやってみましょう。

「矛盾」のはじめの部分の読みの順を数字で右に書いてみました。

楚人<sup>1</sup>有<sup>2</sup>鬻<sup>3</sup>盾<sup>4</sup>与<sup>5</sup>矛<sup>6</sup>者<sup>7</sup>。

この数字の順番どおりにカタカナでふられている「送り仮名」は「ひらがな」に直して書いていく(「書き下し文」にする)と、こうなります。

楚人に盾と矛とを鬻ぐ者有り。

ほぼ、日本語らしくなりましたが、気になるところがありますよね。

「与を」のところですか。

書き下す(日本語の表記にする)際に注意することは、我が国で『付属語(助詞・助動詞)』にあたる漢字は「ひらがな」に直すことなのです。日本語において、助詞や助動詞を漢字で書くことがないことから理解できるはずですよ。

楚人に盾と矛とを鬻ぐ者有り。 【完成形の書き下し】

▼ 次の訓読文を書き下してみよう。

百聞不如一見

「不」は必ず「ず」に、「如」は付属語ではないのでそのままですよ。ただし「如かず」のように、あまり漢字で目にならない自立語(「する」「いる」など)は、ひらがなにして書いてもよい。

▼ もう一つ漢文の訓読・書き下しの際に確認すべきことがあります。

それが、「置き字」といわれるものです。「訓読」の際にふられた送り仮名などによって、漢文の漢字そのものが、日本語においてあまり意味を持たなくなった文字です。

この置き字は、訓読の際(読むとき)も書き下しの際(書くとき)も、ないものとして扱います。

1 詠み飛ばす 2 置き字 3 これ 4 書き下し文

学<sup>1</sup>而<sup>2</sup>時<sup>3</sup>習<sup>4</sup>之<sup>5</sup> 学<sup>1</sup>びて時<sup>2</sup>に之<sup>3</sup>を習<sup>4</sup>ふ

主な置き字

焉 矣 于 於 而

順接 逆接  
場所・対象 時など  
場所・対象 時など  
断定・詠嘆  
断定・詠嘆

「置き字」とは、日本語で訓読する際に、読まない文字のことです。もちろん、書き下す際にも書き記しません。読む場合には、「読み仮名」としてひらがながふられています。

国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容: 「論語」①

⊕ P38~P41

学びて時に之を習ふー「論語」から

氏名

年 組 番



「論語」は、古代中国の思想家である孔子と、その弟子たちの言行録である。孔子は、混迷を極めた時代に諸国を巡り、「仁」(他者に対する愛情、思いやり)による政治を説いた。二千五百年以上にわたり受け継がれてきたその言葉には、人の生き方に対する鋭い観察と深い思索が込められている。

子曰、「学<sup>シテ</sup>而<sup>レ</sup>時<sup>ニ</sup>習<sup>フ</sup>之<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>説<sup>カ</sup>乎<sup>ヤ</sup>。」

有<sup>リ</sup>朋<sup>友</sup>、自<sup>ラ</sup>遠<sup>ク</sup>方<sup>ニ</sup>来<sup>ル</sup>、不<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>楽<sup>シ</sup>乎<sup>ヤ</sup>。

人<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>慍<sup>ミ</sup>、不<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>君<sup>子</sup>乎<sup>ト</sup>。」(学而)

▽置き字を  でくくろう

▼書き下し文にしてみよう。

・子<sup>ノ</sup> 〃

・曰<sup>ハク</sup> 〃

・時<sup>ニ</sup> 〃

・習<sup>フ</sup> 〃

※不亦…乎 反語表現のひとつ。詠嘆の意味も込められ、通常の反語よりも穏やか。(なんと…ではないか)と訳すことよ。

反語ー表面に出した事柄とはうらはらの思いが本心となる技法

・亦説<sup>ハ</sup>ばしからずや<sup>ヤ</sup> 〃

・人知<sup>ラ</sup>ずして<sup>シテ</sup> 〃

・慍<sup>ミ</sup>みず<sup>シ</sup> 〃

・君<sup>子</sup> 〃

▼意味をまとめておこう

子曰、「温<sup>メ</sup>故<sup>ク</sup>而<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>新<sup>キ</sup>、可<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>ル</sup>師<sup>ト</sup>矣<sup>ト</sup>。」(為政)

▽置き字を  でくくろう

▼書き下し文にしてみよう。

▼故きを温めて新しきを知るとは、べつべつのことなのか

「故きを温ねて」と読む場合もある。

四字熟語 温故知新

・故きを温めて 〃

・新しきを知る 〃

※可以…矣 ( )の資格がある。〜ということが出来る。( )の意

・師たるべし 〃

▼意味をまとめておこう

国語学習プリント

date: 年 月 日

学習内容: 「論語」②

⊕ P38~P41

学んで時に之を習ふ-「論語」から

氏名

年 組 番



子曰「学而不思則罔。思而不学則殆。」  
(すなは) (く) (ら) (あや) (む) (為政)

▽置き字を  でくくろう

▼書き下し文にしてみよう。

学んで思はざる とは、どういふ状態なのか

思ひて学ばざる とは、どういふ状態なのか

罔し =  
殆し =

▼意味をまとめておこう

子曰「知<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>如<sup>シ</sup>好<sup>ム</sup>之<sup>者</sup>。好<sup>ム</sup>之<sup>者</sup>不<sup>レ</sup>如<sup>シ</sup>樂<sup>ム</sup>之<sup>者</sup>。」  
(雍也)

▼書き下し文にしてみよう。

・くに如かず =  
▼意味をまとめておこう

子曰「巧言令色、鮮矣仁。」  
(すく) (な) (学而)

▽置き字を  でくくろう

▼書き下し文にしてみよう。

- ・巧言 = 口先だけのたぐみな言葉
- ・令色 = うわべだけ愛想よくとりつくろつこと
- ・仁 = 他者に対する愛情、思いやりの心

▼意味をまとめておこう

※ 「己の欲せざる所人に施す勿れ。」や「義を見て為ざるは、勇なきなり。」  
なども「論語」からうまれた名言である。

ーメモー